

コラム 17：義父の思い出

私の父が亡くなって4か月足らずの、本年7月22日、妻の父である義父が他界しました。大正7年生まれで行年95歳、高齢にもかかわらず、大変元気な人でした。亡くなる前日まで、外を出歩いて買い物をし、好きな風呂(スーパー銭湯)に行き、前夜には好物の桃を食べて休んだとのこと。翌朝、義母が目をさましたら、ベッドの側に倒れており、すでに事切れていたそうです。医師の下した死因は「肺炎」とのこと、最後まで人の世話になることなく「ピンピンコロリ」を地でいったような大往生＝「理想の死」でした。

私と義父との出会いは、当然のことながら、私と妻との出会いの頃であり、今から34年前、1978年の10月にさかのぼります。私は初めて妻の家に行った時が、義父との初対面でした。私はその時に、妻と出会って1か月余りであるにもかかわらず、大胆にも義父に妻との結婚の許しを乞うたのです。妻に事前に相談をしていたわけではなく、今から思うと、全く唐突な行為であったと思うのですが、意外にも義父は何の躊躇もなく「わかりました。いいですよ」と答えてくれたのです。下の写真はその時の記念すべきツーショットです。私が少し安堵の表情をしています。



それから、半年後に私は妻と結婚し、同時に義父と私との長い「付き合い」がはじまるのです。私は他人に対して自分の父を「うちのオヤジ」と言い、義父については「可部のオトウサン」と言っていました。従ってこの文章の中では、以下「オトウサン」と呼びたいと思います。

オトウサンは、私の父と違い、いわゆる学卒でした。旧制中学から高商を出た「誇り高き三菱マン」で、世間話の中にも「私が三菱におった時にー」というセリフが、よく出てきたものです。しかし、プライドの高い人間特有の「とっつきにくさ」や嫌味は全くない人でした。誰彼と区別することなく話しかけ、誰とでもすぐに親しくなれる不思議な「特技」をもった人でした。ハワイなどでも、初めて入った店のオバサンと親しくなって、評判の良い店の情報を聞いてくる、などということを自然にやる人だったのです。



私がオトウサンに妻の父という関係以上に、大きな存在と親しみを感じるのは、クリスマスや花見など事あるごとに、夫婦でやってこられ、一緒に食事や会話をする機会が非常に多かったことがありますが、それ以上に大きいのは海外旅行でしょう。ハワイはオトウサンにとって特別の場所であったようです。日系移民の養父母が住んでいた所であり、多くの親戚や友人が住んでいる場所であり、若き日に一時自分が生活した所でもあったのです。ハワイは、オトウサンにとって、「心のふるさと」であり、懐かしい「青春の風景」だったのでしょう。



子供たちがまだ幼かった 20 年位まえから、ハワイのみならずロスアンゼルスにまで、幾度となく行きました。いつも旅のメンバーは同じでした。私たち夫婦と二人の子供たち、そして妻のオトウサンとお母さんの 6 人です。オトウサンの親戚や友人がいることで、私たちは、普通の観光旅行とは全く異なったアメリカの旅をすることができました。ハワイではオバサン(妹)の家に泊まり、広大なガーデンやアンスリウム園に案内してもらいました。ロスでは、園芸店やメジャーリーグを観戦し、ダウンタウンの花市場を見ることもできました。

7年前には、私の父と母も「初めての海外旅行」に挑戦してくれ、ともに「ハワイ3島めぐり」をすることができました。本来、旅行嫌いの私の父と母が、ハワイに行くことを決心したのは、妻のオトウサンとお母さんが共に行く、ということが大きかったと思います。そして、二人とも「あこがれのハワイ」を、心から楽しんでくれたようでした。今にして思えば、それは、私の人生の中で、二度と帰ってくることのない「至福の時」であったと思います。

私の父も戦時に、中国から東京に転属したことを「わしは運が良かった」といっていましたが、オトウサンも非常に運の強い人でした。当時三菱社員であったのですが、広島に原爆が落ちた昭和20年8月6日の朝に産業奨励館(今の原爆ドーム)に行く予定であったのです。その日、幼少の子供(妻の兄)が急病になったため、急遽代わりの人に行ってもらったのです。予定通り行けば、間違いなく犠牲者となっていたでしょう。次の日に、搜索のため、市内に入っていますから、二次被爆者として、オトウサンは被爆者手帳をもっていました。しかし、その時の様子を話してくれることはありませんでしたし、私の方からも、聞くことは遂にありませんでした。自らの過去の、暗い思い出話などしたくなかったのでしょう。

オトウサンは人を楽しませることが好きな人でした。お酒が全く飲めないゆえ、宴席では必ず、手品をしてくれたものでした。私たちは、「また、オトウサンのショウタイムが始まった」と、食傷気味に見ていたものです。それゆえ、特に反応のよい子供や妙齢の女性をみると、必ず側に行って、実にうれしそうに手品を見せていました。下の写真は、今年の1月、1歳になったばかりの「ひ孫」に、手品を見せているところです。得意の紐のマジックが、どこまで理解できたかは疑問ですが・・・。



オトウサンは95歳の高齢になるまで、元気で歩き回っていましたが、体にいいことは何一つしない人でした。義母や妻の話によれば、家にいる時はTVの前に座って、好きなお菓子やアイスを食べばかり。食事は魚や野菜は嫌いで、かなりの偏食の甘党。唯一の健康法は、「いい水」をしっかり飲むこと。「朝起きると、まずコップ一杯の水を飲み干します。とても気分がさわやかです」とおっしゃっていました。

オトウサンを、95歳の高齢になって「死ぬまで元気」にさせていたものは、人と話、人と接し、人を喜ばせる、ということが大好きであったことでしょう。そのことが生きる力、エネルギーとなっていたのだと、思います。私たちは、オトウサンの、おおらかな性格と、その広い交友関係の恩恵をうけ、楽しい人生とすばらしい旅を共有できたのです。いろいろ世話になりました！、ありがとうね、オトウサン！



「～この一木、何の木、気になる木～ ほとんどいっしょに、あつちに逝ってしまった、オヤジとオトウサン。二人は今頃、ハワイの思い出話でも、しとるんじやろうか」

(12・12・13)